

連載 第3回 『試聴室探訪記』

～谷口ともりの、魅惑のパノラマ写真の世界～

mbl ジャパンのリスニングルーム訪問

フォトグラファー 谷口 ともり

編集委員 森 芳久

はじめに

「試聴室探訪記」、今回は、京都鴨川の支流高野川の辺、ホテルアバンシェル京都内にある mbl ジャパンの試聴室を訪れた。

オーディオの趣味が高じて、ドイツのハイエンドオーディオメーカー mbl の代理店を引き受けることになった、奥村茂貢氏の世界にあなともどうぞ。



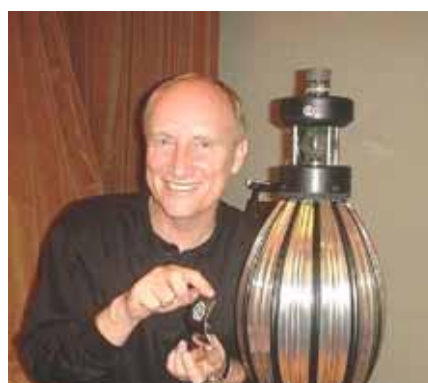
メレツキー氏と mbl (エム・ビー・エル)

楽器などほとんどの音源はあらゆる方向に音を放射する。スピーカーもまた全方向に音を放射することが好ましい。

そこで古くから、風船のような振動板(球)が膨らんだり縮んだりして音を放射する、いわゆる「呼吸球」という理想の形が提案されている。だがこれを実際につくり上げることは非常に難しいとされ、スピーカーの歴史の中では理論だけで、実用化は敬遠されてきた。

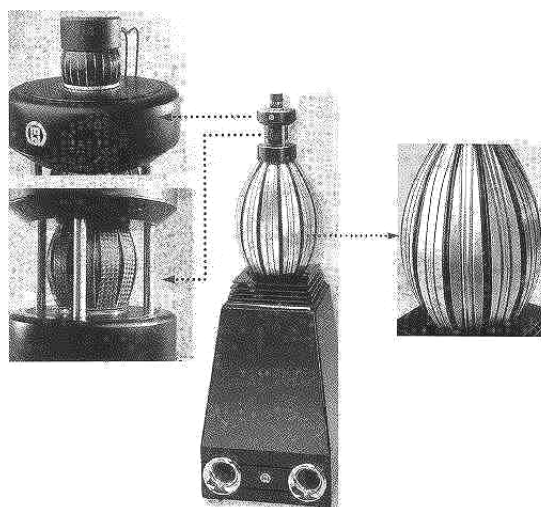
この難問を解決したのが機械・電気の両技術を熟知したヴォルフガング・メレツキー氏だ。生粋のオーディオファンの彼は、何気なく名刺を指で曲げたことから、呼吸球スピーカー実用化のヒントを思いついた。1979年、自ら会社を興し、持ち前の技術で幾多の困難を解決し、今まで例のない新しいスピーカーの製品化に成功する。

他のスピーカーとはあきらかに違ったスタイルと、全ての方向に音を放射するこのスピーカーは Radialstrahler Speaker (全面放射型スピーカー)と名付けられ、そのホログラフィックな臨場感溢れる音はハイエンドの世界で注目を浴びた。さらに、メレツキー氏はこのスピーカーの魅力を最大限に引き出すためのアンプや CD プレーヤーまで手がけ、mbl サウンドとして多くの人々を魅了した。



何気なく名刺を指で曲げたことから、呼吸球スピーカー実用化のヒントを思いついたというメレツキー氏

この mbl、日本ではまだなじみの薄いメーカーであるが、ヨーロッパやアメリカでは古くから高級オーディオ機器のトップブランドの一つとして君臨しその音に魅了されたファンも多い。その音の虜となった一人が、現 mbl ジャパン社長、奥村茂貢氏である。海外のショーでこの音を聴き感動した彼は、この全部のセットを購入したいと思った。しかし、日本に代理店がなく、自らが日本の代理店を引き受けることになる。ミイラ取りがミイラになった。おかげで、我々は日本で mbl 製品に触れ、試聴できることになった。



呼吸球スピーカーの心臓部

(編集委員 森 芳久)

## パノラマ画面の操作説明

- パノラマ写真は、[ここ](#)か、前ページの[試聴室画像](#)を、ctrlキーを押しながらクリックしてご覧ください。
- スピーカー等、マウスを当てて、クリックすると機器の説明文が表示されます。
  - 正面の左右のスピーカーが 101E
  - 中央前の二台のアンプは 9011 (モノラルアンプ)
  - 中央アンプの後ろのダイヤルのついたものがプリアンプ 6010D
  - 右にあるのがパワーアンプ 9008 (右奥) と 9007 (右手前)
- マウス操作で、画面を上下・左右 360 度、自在に回転してご覧いただけます。
- 画面下にある操作ボタンで次の操作ができます。
  - + 画面のズームイン
  - 画面のズームアウト
  - ← 画面の左移動
  - 画面の右移動
  - ↑ 画面の上方向への移動
  - ↓ 画面の下方向への移動